

江塚圃・江芸閣と日本文人の交遊 — 斎藤秋圃筆 江塚圃像をめぐる —

Interrelationship between Jiang Jiāpū, Jiang Yúngé and Japanese literati
— About the portrait of Jiang Jiāpū by SAITO Shuho —

ソーシャルデザイン学科

渡 邊 雄 二

WATANABE Yuji

はじめに

日本における文人活動のなかで、江戸時代後期に多くの漢詩人・儒者らが長崎を訪れた。その一つの目標が文人的素養を持った来訪の清人との出会いであった。19世紀前半、文化文政期には、その中心的な存在として江塚圃、江芸閣兄弟が複数回長崎へ来訪した。江塚圃は日本の文人画に影響を与えたことで知られるが、弟の江芸閣も日本各地から学者、漢詩人らが面会に長崎を訪れ、詩の交歓や詩文集の賛序、跋を求め、さらには市河寛齋のように自身が編纂した詩文を中国で刊行する者もいた。こうした漢詩人らのほか、中島広足のような歌人、あるいは挿花、琴曲など文人趣味を披歴した亀齡軒斗遠など、さまざまなジャンルの文化人の動向を絵画活動と重ね合わせて考証することは、ほとんど行われなかった。

本論では斎藤秋圃が描いた江塚圃像（長崎歴史文化博物館蔵）を例に、本図の背景となった長崎をめぐる日本の文人らの活動と江塚圃、江芸閣との関係から、本図および秋圃という作者の位置を探ろうと思う。そして、日本の江戸時代後期における文人周辺の絵画活動を再認識する手立てとなればと考える。さらに日本の文人たちを駆り立てた長崎や来訪中国人の存在の意義、その底流にある中国文化への思慕といった背景について、視点を提供できればと思う。

1 江塚圃像について^(注1)

本図（図1）は縦173.0cm、横52.0cmの目の細かい絹本に彩色された像主が筆を持って胡坐をかく姿であらわされる。像主は帽子をかぶり向

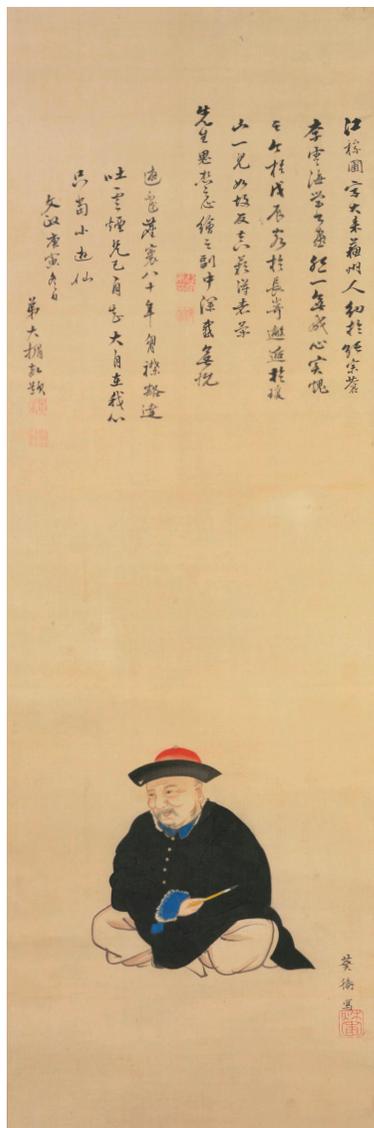


図1 斎藤秋圃「江塚圃像」長崎歴史文化博物館

かって左を向いている。黒の上着には衣文線が丁寧にひかれ、ズボンも淡墨の衣文線に淡彩を添わせる。顔の輪郭や造作は淡墨線に朱を添わせる。丁寧に的確に描かれ、作者の技量を示す。

像上には江稼圃と弟の江芸閣の賛文が記される。改行は作品のままとする。

江稼圃字大来蘇州人幼於張宗蒼
李雲海学書画然一無成心実愧
于今於戊辰客於長崎邂逅於瓊
山一見如故友真難得者哉
先生思想之心絵之副中深感無

「江大来」(白文方印)「稼圃」(朱文方印)

遊戯塵寰八十年胸襟豁達
吐雲煙己自知大自在我心
只当小遊仙

文政庚寅冬日弟大楣敬題

「采琴居士」(朱文方印)

(絵の落款・印章)

「葵衛写」「秋圃」(朱文方印)



江稼圃像 落款・印章

江稼圃の賛は、「(私の名は)江稼圃で字は大来、蘇州人である。幼い時に張宗蒼、李雲海に書画を学んだ。然るに一つとして成る無く、心、実に愧ず。今において、戊辰(文化5年・1808)に長崎に客たり。(秋圃と)瓊山(瓊杵山)で会って一見して旧友のようで、真に得難きものであった。先生(秋圃)の思想の心は、これを絵に描いて中に副えられており、深く感じ、おろそかにできない。」という意であろうか。

自身のことを名乗りながら出身や生い立ちを語るのはやや風変わりな賛であるが、長崎での日本

文人とのおそらく筆記でのやり取りの最初に自己紹介をしていたようで、そのような文章として書いたのであろうか。また秋圃を「先生」と称しているが、やはり日本の文人たちに対して先生と呼ぶことが多かったようだ^(註2)。

弟の江芸閣の賛は文政13年(天保元年・1830)で、江稼圃が秋圃と出会って22年ののちである。賛は七言の絶句である。内容は、「(兄江稼圃は)俗世に八十年遊戯し、胸の内を開いて書画に邁進した。兄は大きな自在をおのずと知り、私(江芸閣)の心はただ小さな遊仙に当たるだけだ。」と兄である江稼圃の人物の大きさをたたえている。

本図は太宰府や博多の町絵師として、その周辺で活動の足跡が多く残る斎藤秋圃(1768-1859)の作例である。斎藤秋圃は、京都や大坂で俳句の絵本などのすぐれた制作を行ったが、九州へ下り、文化2年(1805)、筑前秋月藩の御用絵師となった^(註3)。江稼圃像は賛の年から秋圃の初期の作品であることは認識されていたが、賛者の清人とのかわりやこの絵から秋圃の位置を確認することは少ない。

本図に対するこれまでの多くの解釈が、秋圃の絵と江稼圃の賛が文化5年(1808)に作られ、のちに江芸閣が賛を追って書いたとする^(註4)。しかし、これにはいくつかの疑念がある。一つは秋圃の落款「葵衛」と捺された印章「秋圃」である。「葵衛」は秋圃が斎藤姓を名乗る文化10年(1813)以前、葵を姓として、衛あるいは章行、双鳩などを名乗ったようだが、落款として「葵衛」を記した作品は管見では見ることがない。そして、その下に捺された「秋圃」の印は早期の作品には「穉」「圃」の聯印が捺され、本図のように禾と火を左右逆にした「秋」を使った朱文印は70歳代以降の作品に多く捺される^(註5)。

最近の研究では秋圃の生年を明和5年(1768)と考えることから、文化5年(1808)には秋圃は41歳である^(註6)。したがって印が後から捺されたか、図自体が後に描かれたかではないかと思われる。また、江稼圃、江芸閣の賛文も二つが整然と並び、当初から江芸閣の賛も想定している、あ

るいは同時期に書かれた可能性もあると思わせる。両賛の文字の墨色はほとんど変わらない。

江芸閣の賛文は「文政庚寅冬」とし、文政13年(1830)の12月に来舶した江芸閣の動向と合致する。ただし、江芸閣は賛では秋圃については触れず、兄の江稼圃について年齢や性格を記している。そこには「世俗に八十(年)を過ごした」とあり、江稼圃がこの年に80歳となっていたことを知る。江芸閣は頼山陽と同年で、このとき51歳で、30歳ほど年齢の離れた兄弟であった。

江稼圃、江芸閣は文人画・南画や漢詩の研究の際によく名が挙がる人物であるが、その動向について詳しく検討した研究は、江芸閣について、徳田武氏が市川寛齋や頼山陽、田能村竹田らとの事績を時間軸に沿って江芸閣の動向をまとめたものが、ほぼ唯一といつてよいであろう^(註7)。すなわち、個々の事例や漢詩や絵画といった各ジャンルでの関心について述べられたものがほとんどで、それらを総合的に解釈していくのはこれからの研究課題である。

本論では漢詩や江戸時代の文芸、美術などの諸研究をもとに、江稼圃、江芸閣の動向を追って、本図の意義、秋圃の動向の一端が理解できればと考える。

2 江稼圃と漢詩人、画家

秋圃同様、文化5年(1808)頃に江稼圃に出会った人物として、漢詩人の武元登々庵(1767-1818)がいる。登々庵は備前(岡山県)の漢学者、詩人、書家。閑谷齋に学び京都で柴野栗山(1736-1807)に師事した。文化4年(1807)、西遊の旅に出て、その旅程の中で詠んだ詩を『行庵詩草』として文化11年(1814)に刊行する。その中の長崎での詩集が「巻五 瓊浦探奇」である。巻の表紙は大西圭齋(1773-1829)の扇面蘭図、表紙裏には浦上春琴(1779-1846)の長崎港図を載せ、江稼圃の序を得た。

大西圭齋の絵が描かれることには、武元登々庵との交友があったことが考えられる。寛政11年(1799)圭齋は、登々庵とともに奥州を旅し、

「登々庵奥遊詩画」(広島県立歴史博物館)のもととなった真景図を制作した^(註8)。高橋博巳氏はこの登々庵の奥州遊歴に圭齋が同行したと考証している^(註9)。圭齋は田能村竹田『竹田荘師友画録』では豊前中津藩の画員となったとされるが、奥州行きや登々庵との交渉、長崎での事績を指摘することはない^(註10)。

浦上春琴は『行庵詩草』二巻に巖島図も描く。文化6年(1809)3月から同8年5月にかけて九州へ下り、その間、博多や長崎を訪れた^(註11)。春琴と登々庵の交友については今後の検討であるが、少なくともこの時期春琴が長崎に来ており、二人の間に交渉があったものと推定する。

江稼圃の序を記す。

而今六十又三秋
今到崙山第二遊
追推字画無晨夕
不愛烟霞染翰流
書為
登々葦仁兄
稼圃

「この序は、詩はまずいし、書は一通りだが脱字があるというもので、本詩草(『行庵詩草』)の数多い序の中でも最もお粗末といつてよい」^(註12)と評されるのもうなずけるが、ここからこの序を記したとき、すなわち登々庵は文化5年(1808)12月から文化7年(1810)9月まで長崎に滞在しており、長崎での詩作の完成ののちとすると、江稼圃の序はその後半の時期であろうと思われるが、江稼圃は63歳であった。そして、2度目の長崎来訪であったことを知る。書画の求めが朝夕に多く、風景に親しむことがないことをなげいている。

江稼圃は文化元年(1804)に九番船の財福として来訪し^(註13)、絵画の年記に文化2年(1805)に書いたことを記す作品も複数ある。

年記が確認される江稼圃作品を挙げる^(註14)。
・山水図 文化元年(1804)東京国立博物館
・落木帰鴉図 文化2年(1805)東北歴史館

- ・松林山水図 文化2年 (1805)
- ・山水図 文化2年 (1805) 東京国立博物館
- ・菊石図 文化2年 (1805) 神戸市立博物館
- ・墨竹図 文化6年 (1809) 個人
- ・浅絳山水図 嘉慶15年 (1810)
- ・蜻蛉図 文化11年 (1814) 6月
- ・松図 江稼圃落款 嘉慶乙亥 (1815) 江芸閣賛
丙子 (1816) 長崎歴史文化博物館
- ・秋景山水図 嘉慶23年 (1818) 長崎歴史文化
博物館

文化元年に来朝して、登々庵と出会った文化6年 (1809) ころは2度目の来訪、さらに蜻蛉図が書かれた文化11年 (1814) 6月は江芸閣が初めて長崎に来航した時期である。江稼圃も同船していたのであろう。

そののち『続近世叢語』巻三に「文政五年、呉客江稼圃来寓長崎、求多紀桂山医賸、村瀬栲亭芸苑日抄、太田錦城九経談以還」とあり、文政5年 (1822)、江稼圃は日本の著書を手に帰国したと思われる。その後の動向は不明である。

登々庵が江稼圃の序を求めたのは、弟の江芸閣がまだ来日せず、長崎に滞在する清人の代表的存在であったためかと思われる。登々庵は江稼圃の嘆きに対してなぐさめというような詩を贈っている。
(『行庵詩草』「巻五 瓊浦探奇」)

贈江稼圃
海外漫遊尋勝区
風流名噪日東隅
煩求書画君休怪
巧者従来為拙奴

「貴方の名は日本の隅々まで広まっているので、書画を求められても仕方がない。江稼圃を「巧者」として、「拙奴」たる大衆の求めに従うものだ」とする。

登々庵は無論、漢詩人として中国人との交渉を望んだのであろうが、江稼圃を画家として文人としてどれほど評価していたのか、詩からは不明である。ただし、その情報はいまだ長崎へ下向して

いなかった登々庵の交友した人物には伝わったと思われる。登々庵は長崎へ西遊する途中、文化4年12月、広島で頼山陽と会った^(註15)。

その後、京都に出て文人生活を始めた登々庵は同じく京都で塾を開いた頼山陽とよく交遊があった。また、山陽が文政元年、九州へ旅立った時、長府 (山口県) の小田南畝宅で登々庵の訃報を聞いたことが記され、長崎に来訪した際に山陽が滞在したのは登々庵が仮住まいした富観楼であったのも偶然ではなからう^(註16)。

登々庵のように長崎へ下り、清人と交歓を望んだ文化人、それは漢詩人、儒者、画家など様々で、当時の日本の代表的な文化人が集まってきた。彼らは互いに交友し、おそらく情報を共有し、長崎を目指したと思われる。

よく知られるように江稼圃、江芸閣ともに専門的な書画家、詩人ではない。江稼圃、江芸閣は船主あるいは脇船主、財副などの地位にあつて、長崎に入港した中国船の代表を務めた^(註17)。江稼圃については科挙を受けたが及第しなかったと伝えられる^(註18)が、逆に言えば、学問を習得した人物でもあった。秋圃の江稼圃像賛にもあるように、幼くして書画を学ぶ素養があった。賛にある張宗蒼については1756年に没したので、文字通り江稼圃が学ぶことは幼い時期に限られよう。さらに李雲海について学んだとする^(註19)。

登々庵以前に長崎で江稼圃に出会ったことを記すのは大田南畝 (1749-1823) と伊沢蘭軒 (1777-1829) である。大田南畝は文化元年 (1804)、長崎奉行所に赴任を命じられ、9月に着任した。着任早々、体調を崩して、ひと月以上病床にあつたが、このときにロシアのレザノフが開港を求めて長崎に来航しており、復帰するも公務に多忙を極めた。その中で、唐船で来航した中国人船主張秋琴と詩の唱和を行い、その詩集を『萍寄唱和』と題した。また、自身の『杏園詩集』に張秋琴の序を得た。『杏園詩集』にはやはり南畝と詩の唱和をした銭位吉の跋があり、のちに文化7年 (1810)、江戸にもどった南畝のもとに和韻の詩が送られてきた。そして、張秋琴の船の財副が江

稼圃で、南畝の『瓊浦雜綴』に文化2年（1805）2月1日、唐館を訪れた際に南畝が江稼圃を見かけて、「江泰交をも見しが、大きな漢なり、髭もうるはしくみゆる」とそのようすを記す。江稼圃が大力で文武ともに優れ、書画をよくしたことを伝える。また、伊沢蘭軒も文化3年（1806）に長崎に来て、張秋琴、胡兆新、江稼圃と会っている。南畝は自身の意志というよりも公務で長崎に下った^(註20)。

大田南畝は文化2年（1805）5月27日に長崎聖福寺で浦上玉堂（1745-1820）と会い、催馬楽と漢詩の交歓を行った^(註21)。玉堂は九州に下り、翌年4月まで滞在したようだ。秋圃以前に長崎を訪れ、江稼圃らに出会った文人たちによって、彼らの存在が日本の国内に伝わったと考えられる。

秋圃が江稼圃に師事しようと長崎へ向かったように考えられたが、文化5年の段階で江稼圃が日本の文人たちにどのように見られていたか考えるに、とくに画家としては菅井梅閑（1784-1844）がよく知られ、文化10年ころに長崎に下り、江稼圃に師事したと伝える^(註22)。

それ以前に江稼圃に従った画家と考えられるのは長崎の通事であった遊竜梅泉（劉梅泉彦次郎）である。森鷗外は長崎在住の津田繁二氏に聞いたとして、梅泉の官歴を挙げている^(註23)。「享和元酉年七月廿七日稽古通事被仰付。文化七午年十二月小通事末席被仰付。文政二卯年四月二十七日小通事並被仰付。」とあり、梅泉は江稼圃が来日した文化元年から近侍する可能性があった。なお、鷗外は江稼圃の最初の来日は文化6年（1809）とし、その年を梅泉が江稼圃に師事した時期と考えていたので、実際にはその時期はさかのぼると思われる。そのほかの江稼圃弟子は鉄翁、木下逸雲ら長崎の書画家であり、江稼圃に師事したのは文政元年（1818）ころとされる^(註24)。

したがって、長崎以外の画家は、江稼圃来日当初の文化年間はじめには、まだ江稼圃を慕って長崎を目指していたとは考えにくい。高橋博巳氏は菅井梅閑が江稼圃を知ったのは、偶然に江稼圃の絵を見出したためとする。「梅閑山人行実」（『迎



図2 荒木君瞻「梅閑高士送別会之図」仙台市博物館

春館遺稿』梅閑の友人佐々木中沢の文）に梅閑は谷文晁に学んだが、京都に行き、同郷の東東洋を頼った。たまたま骨董商で入手した扇面画が江稼圃の作と知って、直ちに長崎に赴いたという^(註25)。

文化12年（1815）に梅閑が一時長崎を離れる際に、長崎の清人らが送別の宴を催したが、その中に江稼圃は不在で、弟の江芸閣が中心となっている。

その様子を荒木君瞻が描いたが(図2)、このときには江稼圃はすでに帰国していたのかもしれない。

(梅関高士送別会之図 賛文)

文政戊寅九月余来于崎陽也、画工君瞻頻説、青眼亭上東齋別宴之壯、余怪而問之、君瞻乃図而示曰、其東被巾明服、而立舞者則東齋也、看眼鏡而白衣弄三絃者為江芸閣、佩小刀吹笛者為媚川、彈琴者為二九、在前左手摩頰而聽者為金琴江、作山水者為梅泉、兩手握扇而觀者、為陸品三、在後吟持者為張秋琴、相對圍碁云、亭主人廉布為劉福邦、傍觀者為雀堂、写字者為夢澤、前有觀者二人其少年為沈均谷、老為鄒静岩、余觀而始知君瞻之言、不妄且嘆曰、東齋東人而西遊數年、亦何清人交誼之切一念于此也、其宿縁之深可知也、余与東齋日東人而遊亦遲縁、亦淺無知之何耳、君瞻慰曰為以一言題図翁為亦興関此宴豈異乎、何悔之有固怡悦以君瞻之言書于上図上為 莎郵案

この文は金井烏洲の『無声詩話』にも記されるが、烏洲は東齋を梅関と記すなど語句が一部異なる。

この賛文では図に描かれた人物すべてを説明している。中央で中国人の衣服で舞をおどる人物が主人公の東齋（梅関）で、彼に向き合っ着眼睛をかけて三絃を弾くのが江芸閣である。笛を吹くのは水野媚川で、山水を描くのは梅泉である。ほかに陸品三、張秋琴、劉福邦、沈均谷、鄒静岩など清人たちが集まっている。大幅に踊る梅関を中心に集まった人々が思い思いに書画、音楽に興じている。

また、菅井梅関展では梅関送別に際して作られた寄せ書きを紹介している。これは梅関が長崎を離れた文化12年（1815）以降数年にわたって、江芸閣をはじめとした梅関に関連したであろう長崎に滞在した清人、文人たちによる書画で、中には朝鮮人も含まれる。梅関が長崎の多くの人々に慕われ、別れを惜しんだようすがわかる^(註26)。

梅関は江稼圃、江芸閣兄弟によって、はじめて「読書」の習慣を身につけることができた^(註26)と高橋氏は指摘する。来航の清人や中国をよく知る人々と交渉し、文人らしさを身に着けたようにうかがえる。梅関が一時長崎を離れたのちの動向は明ら

かでないが、秋圃の周辺にもいたことが俳句集の挿絵を秋圃と共作していることが挙げられる。

橋富博喜氏によれば、梅関は秋圃も絵を寄せた甘木の梅窠帰來の追悼の俳諧集『うめわさむ』（文政2年（1819）刊 福岡大学図書館所蔵）に絵を寄せる^(註27)。梅関と秋圃は江稼圃の弟子というように関連付けられるが、秋圃の画風は江稼圃とは大きく異なり、絵の師弟関係は考えにくい。秋圃を通じて梅関は九州北部の俳人と交渉を持ったのであろうか。

田能村竹田は文化元年（1804）12月ころ熊本から、翌2年4月に京都への途中各数日、文政9年（1826）9月7日～文政10年10月と3度、長崎を訪れたが、直接、江稼圃について言及することはない。竹田が江稼圃に触れたのは、鉄翁の言葉を引いて江稼圃の絵に対する考えを述べる。『屠赤瑣々録』「春徳和尚之語」

「江大来（江稼圃）は胸中に古人の山水図を記して貯ること百余あり。其より変化し来りて筆を下すと自ら言へりとそ。」

竹田自身は江稼圃を高く評価していなかったようで、『山中人饒舌』にも「己巳歳（文化6年・1809）竹田は江稼圃がこの年に来たと考えていた）江大来稼圃者至。工山水排鼻自喜。但覚乏清潤致耳。」とその画風に誠意や清らかさに欠けると感じていたようだ。これは竹田が文政10年（1827）に江芸閣と出会い、填詞について詳しく学んだり、江芸閣の着賛を自身の絵に得る交遊とは大きく異なる^(註28)。

浦上春琴は文化6年（1809）～8年に長崎を訪れている。先述した武元登々庵の『行庵詩草』「瓊浦探奇」の表紙絵を提供しており、序を担当した江稼圃と接触があったことは推察できる。秋圃が江稼圃に会ったのは、これよりも前であった。秋圃は何を目指して長崎に来て江稼圃に会ったのか。秋圃はさらに弟の江芸閣とも交渉があった。

3 江芸閣と漢詩人

次に江芸閣についてふれる。兄の江稼圃とは異なり、江芸閣に会うために多くの漢詩人、儒者ら

が長崎を訪れた。このことについては先述した徳田武氏の「江芸閣と日本文人交流年表」^(註29)に市河寛齋、頼山陽を中心に、江芸閣とのかかわりを江芸閣の初来航以来、時間軸に従って詳述されている。以下、徳田氏の記述からまとめる。

江芸閣は先述したように船主、財副などの職にあったために、その来訪の時期、回数などが明らかである。ただし、徳田氏の論文から、江芸閣が天保4年(1833)まで京都の雲華や水野媚川にあてた手紙があり、その時期まで長崎に滞在したことがわかる。

文化11年(1814)5月、江芸閣が初めて長崎を訪れたが、この際に市河寛齋が江稼圃に出会っているかもしれない。「此度の船には江荷圃の弟江恵圃(江芸閣)、名大槐見へ候。詩書に耽り候人物にて候。」(6月17日付家信)とある。

寛齋は江芸閣、同じく来航した張秋琴と詩の交歓を行い、『五山堂詩話』7巻、息子市河米庵の『試毫帖』を贈り、批評や跋を求め、江芸閣は『試毫帖』に跋を与えた。寛齋は息子米庵の手輯『略可法』5巻、自身の『瓊浦夢余録』にも芸閣の跋を得た。張秋琴は寛齋編著の『全唐詩選』を中国に舶載し、のちに『知不足齋叢書』のなかに刊行された。

寛齋と江芸閣の詩の交歓は『瓊浦夢余録』に詳細に記されている。この中に江芸閣が寛齋に与えた旧作の中に兄江稼圃が日本に赴くのを送る詩がある。

送稼圃兄重赴日本

草色満江城
 萋々悵別情
 河橋一杯酒
 千里送君行
 関樹曾相識
 雲山似遠迎
 崎陽旧遊地
 去矣慎經營

おそらく、江稼圃が二度目の来訪のために出航

した際に作られたものかと思われる。

また、寛齋は家への通信に江芸閣について伝えている。「此人(江芸閣)売買等にも一向無心にて、只々詩書のみ楽しみに申候」と、商売に無関心で詩書に専心していた様子を述べる。

文化11年(1814)9月寛齋は、長崎からの帰路、備後神辺の管茶山を訪れ、そこで山陽とも会った。ただちに長崎の最近の情報が山陽らに伝わったことを徳田氏も推測している。翌、文化12年(1815)正月、頼杏坪が藩命により長崎へ下る。このとき江芸閣は帰国のため会っていない。12月、寛齋は谷文晁・文一が描き、亀田鵬齋が序、大田南畝が「後水鳥記」を記した「高陽鬪飲図巻」の跋に長崎での江芸閣らのことを記した。(早稲田大学写本による)

高陽鬪飲 前年余在崎陽 屢与唐衆劉景均、
 江芸閣輩飲 皆能飲其酒而不能飲吾酒 因叩其
 說乃云 苦醇醞而頭痛矣 試味其所齎紹興酒者
 甚淡而帶酸 飲至数十盃 始能面潮紅已 因觀之
 八僊飲中三盃已上飲至五斗者 亦甚易々已
 頃千住中六隱居 以酒鬪図巻 乞跋尾 南畝醉
 客記之 鵬齋酒人序之尽矣 如余小戸其復何言
 唯記前年より唐衆飲事而返之 嗚呼使此酒兵与
 十萬相当千倉海上別 其能不醉倒而歸者而僅三人也已

乙亥嘉年月寛齋寧題時年六十七(下線渡邊)

文化12年(1815)の跋の前年、寛齋が長崎において清人劉景均、江芸閣らと飲酒して彼らが紹興酒を飲んでいてことを伝える。大田南畝はすでに長崎を訪れており、共感を持ったものだろう。

文化14年(1817)、鈴木椿亭『椿亭詩抄』に江芸閣は識語を記す。また、文政7年(1824)2月、野村篁園『採花集』に朱柳橋とともに序を記す。彼らと長崎で交渉があった。よく知られるように頼山陽も江芸閣に会うために文政元年(1818)3月から翌年正月にかけて長崎へ西遊したが、帰国していた芸閣に会うことはかなわなかった。

山陽のもとへは、武元登々庵、市河寛齋など、長崎行きを果たした文人たちが訪れ、長崎の情報

を伝えていたであろう。山陽のもっともよき理解者で擁護者であった篠崎小竹も早く享和3年(1803)に長崎を訪れており、大槻玄沢の子大槻盤溪も文政12年(1829)に長崎行きを果たしている。大槻盤溪の『瓊浦筆語』の序は江芸閣と朱柳橋が記す。

頼山陽の叔父頼春風も石井豊洲とともに文化4年(1807)に長崎へ行き、頼杏坪も文化12年(1815)に公務で長崎へ行くというように山陽の縁者も長崎へ向かった。さらに懇意であった梁川星巖と妻紅蘭も文政5年(1822)に赴くなど山陽の周辺の漢詩人あるいは儒者たちが長崎を訪れていた。また、插花や月琴で知られる亀齡軒斗遠も自らの刊行物に江芸閣の辞を求めており、山陽と関係の深かった人物たちが長崎で江芸閣と交渉をもつ理由があったのであろう。彼らの関係はまさに文人的な交友であったと思われる^(註30)。

山陽自身は残念ながら、江芸閣に会うことができなかったが、江芸閣は翌文政2年(1819)に再び長崎を訪れ、江馬細香に寄せる詩を作り、山陽へ書簡を送り、その中に細香への伝語をいれた。これに関連して文政4年(1821)正月、山陽は「寄懐江辛夷」三首を作る。江芸閣からの書簡への返詩であろうと徳田氏は推測する。

江芸閣の寛斎との交渉を『瓊浦夢余録』にみたときに、文化11年(1814)から翌12年に江稼圃について触れることがない。したがって、菅井梅閣が文化10年(1813)ころから長崎へ下り、一時離れ、再び訪れた間にも実際に江稼圃に師事した時期はわずかであったかと思われる。

文政5年(1822)6月江芸閣、長崎に入津。先に述べたように、この年、江稼圃が多紀桂山『医牘』、村瀬栲亭『芸苑日抄』、太田錦城『九経談』を求めて持ち帰ったとすることから、同船して長崎に来航したと考える。この年、12月にも江芸閣は長崎に入津しており、行き来は頻繁であった。

このうち文政7年(1824)、正月8日、江芸閣、沈綺泉とともに長崎に入津。2月、江芸閣は朱柳橋とともに野村篁園の『採花集』に序を書く^(註31)。4、5月、遠山荷塘、長崎で江芸閣と親交があっ

た。(5月18日に亀井昭陽に報告^{註32)}。7月5日、江芸閣長崎に入津。長崎に来た梁川星巖と頻繁に唱酬する。文政8年(1825)、6月6日、江芸閣、長崎に入津。冬、田能村竹田、亀山夢硯に江芸閣との約束を果たすべく長崎へ行くことを告げる。

以下、徳田氏の「江芸閣略年譜」に従って、江芸閣の関係事項を加える。

文政9年(1826)、4月19日、江芸閣長崎に入津し、6月23日、得泰船に乗船の野田笛甫の『海紅園小稿』に跋文を与えた^(註33)。9月9日、田能村竹田、長崎着。25、6日江芸閣出船。

文政10年(1827)閏6月3日、江芸閣、長崎に入津し、7月、田能村竹田が水野媚川の手引きで江芸閣と面会した。この秋、江芸閣、田能村竹田の「風雨溪居図」「秋嶺夕陽図」に題詩を書いた。10月、江芸閣、竹田の填詞集『清麗集』『竹田布衣詞』を批評し、識語を与えた。12月、江芸閣、長崎入津。

文政11年(1828)5月、頼山陽、江芸閣から贈られた詩に対して「疊韻、答江大楳、三首」を作る。夏から秋、江馬細香、江芸閣への疊韻詩を作る。

文政12年(1829)、2月8日、江芸閣、長崎入津。3月13日、大槻盤溪、長崎へ到着し、江芸閣、陸吟香と会見する(文献)。9月、江芸閣帰国。

天保元年(1830)6月13日、江芸閣、長崎に入津。12月19日、江芸閣、長崎に入津。

天保2年(1831)12月長崎に入津。このうち天保4年(1833)にも事績が見いだされることから、江芸閣の長崎来航が頻繁で、長期にわたったことがわかる。

江芸閣自筆の書画作品の検討は、ほとんど行われておらず、これからの検討であるが、上記の漢詩文の序跋のほか、江稼圃像のように絵画の賛文にその筆跡がみられる^(註34)。

江芸閣の動向は徳田氏が指摘したものにわずかに加えたが、多くの日本の文人との交渉が見られる。しかし、秋圃の例もそうだが、ほかにも数多くの人物との交流が考えられ、新たな資料による確認についてはこれからの課題である。

4 斎藤秋圃と江稼圃、江芸閣

これまで見てきた中で、斎藤秋圃が描いた江稼圃像はどのように位置づけられるだろうか。江稼圃は文化元年頃に最初に長崎に来航して、秋圃と出会った文化5年は2度めの来日であったことが、登々庵の詩文にも見える。そして、図の江芸閣の賛が書かれた文政13年（天保元年・1830）冬には、たしかに江芸閣は長崎に滞在しており、22年の間の兄弟二人と秋圃の長い交友を確かに示している。

太宰府市教育委員会では斎藤家の悉皆調査を行い、詳細な調査報告書を刊行した^(註35)。その中に江稼圃・江芸閣の書簡があることを井形栄子氏より教示いただいた。

(韋行宛江稼圃書簡)

江泰交頓首 〓 〓 舞行
 出番日近 団禁猶猶〓揚帆南渡 天水一方安能奉
 教於
 君矣惆悵如何〓
 兄雅度丰姿華妙群超 名留千古諒不誣也〓
 年来六十有四 精神憊怠況名利二字 早付浮雲
 今回棹返家早与〓
 輩読書写字飯畢独歩溪邊或焚〓坐 或執卷飲
 茶而矣
 倘有鴻使即
 当奉候惟望
 閣第福祿綿々英保安康
 玉体自重書不能尽稍星片言呈
 覽是〓
 上
 韋行先生如手 弟江稼圃又長
 桃月十二日

泰交は江稼圃の字、秋圃（ここでは葵韋行）への書状であるが、まもなく長崎を離れて、帰国する際に発信したようで、このとき江稼圃は64歳であった。先述した武元登々庵への詩中（文化6（1808）～8年制作か）に自身のことを63歳であると述べたことから、これは文化7年（1809）～9年に当たると思われる。文面から江稼圃の帰

国の出航が近づき、秋圃の心配にこたえ、親しく「雅兄」と語りかけ、（高齢のため）自分が書画や散歩、飲茶などにいそしむために帰郷することを親しく述べており、二人の交友をうかがい知る。

また、江芸閣の書簡3通のうち、次の書状は「巳十一月朔日」の期日が記される。

(翰香・秋圃宛 江芸閣書簡)

奉懷翰香秋圃

常思秋圃並翰香 一画一堂皆檀場 明夏再来
 崎館裏山楼飲話滄桑 録呈

翰香

二長兄笑止 江芸閣（印）寄言 巳十一月
 朔日

秋圃

詩の中で秋圃と翰香の二人、皆が居並ぶ中で絵を描いたことを常に思う。明るく夏もまた長崎に来て、館裏の山楼で飲飲することを示唆している。この巳年を文政4年（1821）とすると翌5年の6月にはたしかに江芸閣は長崎に入津している。「翰香」とは、長崎の画家、今井佳相であろうと錦織亮介先生より教示いただいた。秋圃とともに江芸閣とおそらく長崎において親しく交遊していたことがうかがえる。秋圃が江芸閣の周辺で翰香など画家たちと交遊があったのは、長崎歴史文化博物館蔵『書簡集』に彼らの名が挙がることから知られる^(註36)。そして、秋圃は江稼圃像賛に書かれる江稼圃に出会った戊辰（文化5年）だけでなく、そののち、江稼圃、そして長崎の人との継続的關係があった。これは江芸閣のほかの2通の書状にもうかがえ、秋圃と江芸閣の関係を示す。

(秋圃宛 江芸閣書簡)

二十日一瀬屋雖属權場究未 全美文筆之士
 未能暢所欲言 皆因有人備之患至今 尚自挽歎
 也、茲承 閣下妙才絵図一舎団、稟權会之景
 謝何以堪早晚得暖進館一叙望切々々此改并旧
 秋圃供奉 青朕 江芸閣 花押 小春廿五日

「權場」についての言及で、閣下（秋圃）のすぐれた絵図によってこの様子（場所）を示すこと

ができた。これをはやく館に進めて、古いものを改めたいかと。秋圃が江芸閣のために絵図を描くという、画技を実用として用いていたことがうかがえる。

(秋圃宛江芸閣書簡)

一技妙筆感靈通 触手便成造化功 天地文氣隨
所有 被君收拾在胸中
真箇能開頃刻花 霜毫着帚響沙 酒家知己仙
家侶 擲筆談諧笑語譁
俚言二首草呈
秋圃老先生正 江芸閣拜稿

江芸閣が秋圃に与えた二首の詩。秋圃の筆技が非常に優れ、「天地文氣」が見られるとほめたたえる。また、秋圃が眼前で描く様子をのべ、それが酒家であり交友があったことを記す。すなわち江芸閣も直接秋圃と親しく関わったことがうかがえる。

秋圃の長崎の事績として、花月楼（引田屋）に当主の一人と考えられる肖像「山口氏像」がある。山口氏の肖像は永見徳太郎『長崎乃美術史』に白黒の挿図があり、「秋圃」の印が捺されていることがわかる。さきに紹介した太宰府市の調査報告から、花月楼には「群鶴図」一幅が所蔵される。群鶴図には「喜寿秋圃」の落款があり、秋圃77歳のときである。また、長崎歴史文化博物館所蔵の「梅雀・夾竹桃猿図」2幅は秋圃と月雪香の競作であるが、賛は熊本の歌人中島広足による。このとき秋圃は75歳である。また、花月楼近くの梅園天満宮の「梅園天満宮縁起図」3幅対も描いている。これには「筑前太宰府 行年八十一歳秋圃写」とあり、秋圃の画業の後半に描かれた作品である。このように、秋圃は長きにわたって、長崎と交渉を持ったと考えられる。江塚圃、江芸閣との関係も含めて、秋圃の長崎での活動の範囲を広げて考えるべきかと思われる。また、江塚圃像の印章が「秋圃」印であることは、秋圃の後半の制作と考えたい。そうすると江塚圃像の成立はどのように考えるべきであろうか。

5 斎藤秋圃と文人活動

江塚圃像、そして秋圃という画家をどのように位置づけるかという課題に、秋圃の行動、交友を北部九州の文人の交友から見てみたい。

一つには頼山陽が九州へ下った際に広瀬淡窓と面会した様子を描いた秋圃の「山陽淡窓談話之図」（図3）である。原図の存在は不明で、東京文化財研究所の乾板写真で確認するのみだが、山陽と淡窓、そして秋圃の位置を示している。本図については橋富博喜氏が『太宰府市史』のなかで紹介している^(注37)。

絵は山陽と淡窓が端坐して相向かい合うようすを背景なく描く。絵には秋圃の落款と印章がある。人物像上の長文の賛は広瀬淡窓によるもので、本文は淡窓の詩集『遠思楼詩鈔 初編 乾』に載る。文面を読むと山陽が赤間関を渡って西にやってきた。まず亀井老（文化11年・1814に南冥は没しているので息子の昭陽）を訪ね、「痛飲狂歌半月留」った。次に肥前の豪士「劉雲竜、騷騷僅二子」

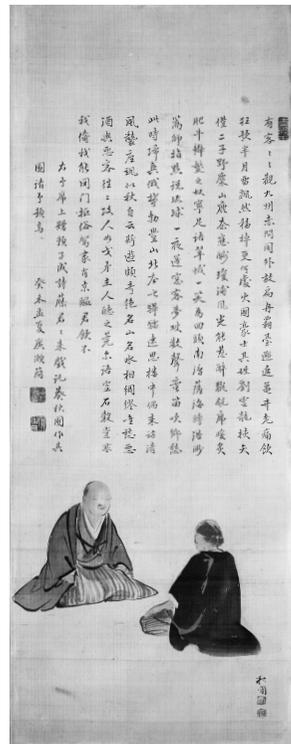


図3 斎藤秋圃「山陽淡窓談話之図」東京文化財研究所提供

と会い、詩の応酬を行った。瓊浦（長崎）は風光明媚で酒も進んだ。次に南の薩摩に向かい、琉球にまで思いをはせた。次第に郷愁にかられたが、豊後の北にある私（淡窓）の遠思楼をたまたま訪ねると、清風が流れ秋にも似た。この旅はすこぶる奇絶で名山勝水は絶え間なく訪れたが、ただ悪酒と悪客が往々として戈矛のように人（山陽）を攻めたことを憂える。というように山陽が九州行で、腐心したことをぼやくのを聞き、詩には「主人（淡窓）はこれを聞いてにっこりとして笑う。空石（昭陽）、（古賀）穀堂は（確かに九州の人間だが）私の婿ではない（邪険な扱いをしたかもしれないが、私の責任じゃない）。私は門を閉ざして、俗駕（俗人）を拒むことはできる。家には京風の酒食がある。まあ一杯やりなさい。」とある。

席上走筆贈頼子成

有客有客觀九州。赤関西去放扁舟。霸台邂逅龜井老。痛飲狂歌半月留。飄然移棹更何處。火國豪士其姓劉雲竜駢騷僅二子。聊挾一矢相応酬。瓊浦風光能惹醉。髣髴席暖灸肥牛。辮髮之人寧足語翠蛾一笈為回頭。南遊薩海轉浩渺篙師指点說琉球。一夜篷窓客夢破數聲蠻笛吹鄉愁。此時歸興方鬱勃。豐城北向叱驂騶。遠思樓中偶來訪。清風襲座颯似秋。自云此遊頗奇絶名山勝水相綢繆唯愁惡酒与惡客。往々攻人如戈矛。主人聞之莞爾笈空石穀堂。非我儔我能閉門拒俗駕家有京醞君飲求。

これに対する山陽の詩は、松竹の間に開かれ、川に臨んだ淡窓の塾で、

訪広瀬廉卿

咿唔声処認柴関
村塾新開松竹間
斗折蛇行臨筑水
竹批馬耳見豊山
羨君白首此間住
愧我青鞋何日閑
且喜一尊共醒醉
細論詩律手頻刪

山陽と淡窓の面会は文政元年（1818）の11月8日であったが、この図は「癸未孟夏」、すなわち文政6年（1836）の5月に淡窓によって賛が書かれた。それによると千原鎮知が戯れに「葵秋圃」に依頼して図を作らせ淡窓に賛を依頼したとする。千原鎮知は日田の豪商まる千、丸屋千原幸右衛門で、夕田の父である。

橋富氏によれば、「葵秋圃」と呼ぶことが淡窓と秋圃が旧知の間柄であり、秋圃が文政2年（1819）5月27日、6月5日に日田において出会うっており、原古処や亀井昭陽が彼らをつなぐ存在だった、と指摘する。また、斎藤家の家伝では秋圃も文政元年（1818）に山陽を訪ねたことも紹介している。

秋圃と長崎との関係、また、文人たちが長崎へ向かった状況を見てきたことから、山陽と秋圃には長崎に滞在したという共感があったと考える。すなわち漢詩人と画家という立場の違いはあったが、江戸時代後期の文化人の志向を共有していたと思われる。むろん、秋圃は山陽の存在を認識していたし、篠崎小竹や大田南畝など早くに長崎を訪れた人々の情報を受け取っていた。当時、淡窓の周辺で、もっとも山陽の心情を共有した人物であったかもしれない。また、それを知って単に肖像描きとしてではなく、その場に同席していた気もする。

淡窓もこののち長崎を訪れる。しかし、それは山陽が自身の詩や文章を中国へ紹介するような野心にあふれたものではない。淡窓は昭陽や穀堂らが山陽を煙たがったような対応はしなかったが、自身の学問を中心とした世界観からは山陽の野心を受け止めるのは、詩にあるように、「自身が俗物ではなく、酒を一献呈するくらいのことにはした」。

江芸閣に会うことがかなわなかった山陽に実感として、中国人のことを語れたのは、筑前豊後では、はやく長崎に出向いた竹田と秋圃くらいではなかったか。篠崎小竹も父加藤周貞が豊後出身であるなど豊後にゆかりのある人物であるが、すでに大坂在住の人であった。

秋圃は今日の美術史の上では、京都四条派に近

い画家とされるが、長崎に向かったという点では、当時の文人、学者などの傾向を帯びている。画家では浦上玉堂、春琴父子のほか、菅井梅閑など文人画家がいるが、秋圃の画風はまったく文人画風とは異なる。秋圃が長崎に向かった真意はさらに検討するとして、長崎の経験はその生涯に大きな意義を持つと思われる。

橋富氏も指摘した福岡の亀井家との関係も作品に見られる。亀井南冥は文化2年（1805）に秋圃の鹿図の賛者として共作している（福岡市博物館蔵^{註38}）。福岡の亀井家は広瀬淡窓、頼山陽や梁川星巖など、江戸や関西から長崎をめざした文人たちが立ち寄る拠点でもあったことを伝える。こうした北部九州の儒者、漢詩人、そして、書画を制作したいわゆる文人たちが秋圃の周辺にいたことは彼の活動と決して無縁でなかったと考えたい。

むろん、俳句集の挿図などの活動から俳人とのかわりには良く知られているが、『つはものつくし』や『わすれくさ』の選者菅沼奇淵との関係について詳しく記したものは少ない。秋圃とはいったいどのような画家であったのかは、やはり一面しか知られていなかったのではないかと考える。

このほか、秋圃は秋月の儒学者原古処のほか、亀井南冥、広瀬淡窓との書画の共作があり、彼らとの交友があった証である。また、頼山陽と亀齡軒斗遠、頼梅颯との交友を見る『三十六峰山陽外史遺墨』の編集に斎藤秋圃の名がみえることも秋圃が山陽と近い関係であったことを示唆する^{（註39）}。

まとめ

斎藤秋圃の江稼圃像の背景を賛者の江稼圃、江芸閣と日本文人たちの動向、秋圃とのかかわりなどの視点から、その要素を挙げてみた。そこから見えてきたことはいくつかある。

像の賛文から秋圃が江稼圃に文化5年（1808）に会ったことは事実であり、江稼圃は秋圃の絵が優れていることを讃えていることから、賛が秋圃のために書かれたものと判明する。ただし、文化5年は絵の修学を目的として江稼圃に会うには時期がやや早いと思われる。しかも江稼圃の画風は

秋圃が修学した画風とはまったく異なるため、その出会いは別の目的、機会によるものであろう。さらに、江芸閣の賛が文政13年（1830）であることは、この絵の成立経緯、制作意図に大きくかわかると思われる。それは単なる追賛というよりも、秋圃は江芸閣との交友もあったことから、この絵が成立したと考えたい。本図の秋圃の落款が「葵衛」、印章が「秋圃」となっているのは、彼らの書簡から江稼圃に対しては「葵衛」、江芸閣に対しては「秋圃」と名乗っていた両者へむけて、この落款と印章を用いたと思われる。するとこの絵は文化5年ではなく、江芸閣の賛の年、文政13年の成立の可能性が高いと考える。江稼圃と江芸閣がこの時期同時に賛を書きうるのか、と考えるに、江芸閣は文政13年冬に長崎に来航しているが、江稼圃は文政5年（1822）に日本の書籍を持って帰国して、その後日本との交渉は明らかでない。ただ、この前後の江芸閣の動向を見ると、頻繁に帰国しては長崎に来るという行動をとっていて、長崎で江稼圃像を預かり、持ち帰って江稼圃の賛を得ることは可能であろう。ただし、このころ江稼圃は江芸閣の賛のように80歳を超えており、その年齢にふさわしい書体であるかなど経緯はさらに検討すべきであろう。

斎藤秋圃の研究としては、本図が文化5年の段階で「秋圃」を名乗った証であったが、それが成立しなくなる。「秋圃」を文化年間前期に名乗ったと考えるのは、文化2年（1805）刊行とする俳句集『つはものつくし』において、「しらぬ火のつくしの国なる秋圃」と記されていることにもよる。

文化2年は秋圃が秋月藩に仕官した年で、この時点ですでに秋圃と名乗る、すなわち江稼圃に出会う以前に秋圃と名乗ったことになる。これは『つはものつくし』の年記を確認すると、序文に「文化丑のとし」とあることが根拠かと思われ、『国書総目録』はじめ、多くの文献がこれを文化2年としているが、文化年間の丑の年は文化14年（1817）もあり、後者とすると秋圃は文化9年（1812）に描いた個人蔵「三聖図」に「文化壬

申之冬写秋圃」と落款に記し、「秋」「圃」の印章を捺するのが秋圃を名乗る初見となる^(註40)。つまり秋圃伝の先駆許斐友次郎氏が「(秋月藩より)画名を秋月の秋と稼圃の画の字を採って秋圃と賜った(「世の美術愛好家へ 筑前の齋藤秋圃画伯を憶ふ」^(註41))」という来歴に近いことになる。ちなみに許斐氏は、秋圃はすでに享和3年(1803)ころから長崎に下り、そこで秋月侯に出会い、召し抱えられるという経緯を述べている。

今回確認できたのは、秋圃と江稼圃の関係は江稼圃像での競作だけでなく、おそらく文化7~9年に江稼圃が長崎を離れる際に秋圃に手紙を送るというように、彼らは継続的な関係を築いたと思われる。そして、それは弟の江芸閣にも引き継がれた。秋圃はやはり江芸閣とも交友を深め、文政4、5年にも長崎での交遊を約束するなど、身近な存在として手紙を受け取っている。秋圃は文化5年、江稼圃に出会って、江芸閣の賛を文政13年に得るまで、継続的な関係を持った。そして、長崎に残る秋圃の作品から、その後も秋圃は長く長崎の地域の人々と交渉があったと考えたい。これまでの秋圃研究では、秋圃と長崎の関係は江稼圃像と晩年の長崎に残る絵画数点にとどまり、継続的な関係とみることが少なかったように思われる。しかし、秋圃は江稼圃、江芸閣とも長く交遊があり、彼らの身近に存在した様子がかがえることから、秋圃は長崎と継続的に親しい関係を続けていた、具体的に言うと頻繁に訪れていた、あるいは仲介をする人物によって交渉を続けたように見受けられる。

これにはいくつかの視点が考えられる。一つは長崎への関心である。それは当時の日本で唯一開かれた窓口として、西洋や中国の文物を吸収できるという土地である。秋圃の関心はなかなか測りがたい。それは、彼の画風は中国人から学ぶものではなく、彼の絵画や文化の基盤と思われる俳句の世界もない。

これには秋月藩が長崎警備に重要な役割を果たしていたことも要因かもしれない。秋圃と江稼圃が出会った文化5年はイギリス船が入港して、大きな事件(フェートン号事件)となったが、警備

を受け持った九州の各藩、特に福岡藩と佐賀藩の負担は大きかったが、秋月藩はその先鋒を担っていたようだ。秋圃と秋月藩の関係は改めて考えた方がよいだろう。秋圃にとってお抱え絵師となることと、長崎へ向かうことの比重はどうであったか。そして、今回もう一つの要素として、長崎の清人、すなわちここでは江稼圃と江芸閣という商人でありながら、詩書画にたけた人物へ近づいた。これは秋圃に限らず、当時の日本の文化人が関心を持った人物であった。無論、彼らは中国本土や日本の絵画制作を行う者からすると、名ものちに残すような大家ではない人材であった。しかし、とくに漢詩人にとってネイティブの言葉は彼らの求める対象であったであろう。また、彼らと出会ったのち市河寛齋や頼山陽のように自身の著作を中国で刊行することになった人物もいる。

以上のように考えると、秋圃は当時の日本の先進的な「文人」世界に近い人物であったと思われる。斗遠に見るように、それは漢詩人や儒者に限らず、多様なジャンルの文化人が長崎、江芸閣を求める時期があったような気がする。彼らは市河寛齋、頼山陽などが認め、近づいた人物である。そのように考えると秋圃が描いた江稼圃像は化政期の日本文化人の一つの憧憬の象徴に見える。江稼圃に会い、自身の絵に江芸閣の賛を得るのは、長崎に関心を持った文化人の理想であったかもしれない。

この図が完成した文政13年(天保元年・1818)以降、秋圃は藩を離れ、地域の絵馬描きなどに手を染める。江芸閣は天保4年(1833)までの活動が知られるが、山陽は天保2年(1831)に没し、江芸閣を中心とした化政天保の文化人が長崎へ向かうようすを見ることが少なくなった。しかし、その後も様相を変えながら日中の文人的な交友が続いたと思われる。

秋圃はその後も長崎の地域の人との交渉が続き、花月楼(引田屋)の当主像をはじめ、長崎の求めにも応じたが、清人や文人との交渉は少なくなったのではないと思われる。しかし、秋圃が江稼圃、江芸閣ほか清人、頼山陽、広瀬淡窓など、亀

井南冥・昭陽ほか中央、九州北部の儒者、文化人などとの交渉を持ったのは、彼の一つの資質として、のちの筑前の弟子および系譜のなかから近代にかけて吉嗣拝山、村田香谷など文人志向の画家を輩出する、あるいは彼らが漢詩人など文人との交渉を続ける礎となったのではないかと考える。

注

- 注1 許斐友次郎「世の美術愛好家へ 筑前の齋藤秋圃画伯を憶ふ」(福岡日日新聞)に「また、秋圃は稼圃の肖像をえがき、稼圃の弟江芸閣の讚あるものを遠賀郡の芦屋倉野煌園が所蔵していたが、今長崎某家の有に帰してゐると聞いている。」とし、鉄翁の弟子倉野煌園が所蔵し、この記事が書かれた昭和8年には長崎にあったとする。記事は『太宰府の文化財第133集 太宰府の絵師調査報告1 齋藤秋圃・梅圃関係資料』2018年太宰府市教育委員会による。古賀十二郎「長崎画史彙伝」『来朝諸家 江大来』に倉野煌園が鉄翁の没後、遺品を手に入れ、さらに江大来の画像を偶然に手に入れたことが記される。
- 注2 (参考) 市河寛齋『瓊浦夢余録』(文化11年)に江芸閣が寛齋に宛てた詩。
七夕唱和
鳥雀應先集。機梭合暫停。人間逢七夕。天上会双星。整孫迎新月。穿針倚画屏。多情小兒女。乞巧向空庭。
右江芸閣
寛齋老先生正
- 注3 「秋月諸士系譜附録」、秋月郷土館蔵「亡家系譜」「秋府諸士系譜」
- 注4 『[特別展] 一筑前四大画家の時代—齋藤秋圃と筑前の絵師たち展図録』作品解説 福岡県立美術館 平成14年
- 注5 橋富博喜 発表「齋藤秋圃 一その年齢と印章について」第78回近世美術研究会 2012年
「太宰府絵師調査資料目録【齋藤秋圃1】」『太宰府市公文書館紀要—年報太宰府学』第14号齋藤秋圃特集号 太宰府市公文書館 2020年3月
- 注6 小林法子「筑前関係絵師資料 一齋藤秋圃略年譜一」『福岡大学人文論叢』1993年 福岡大学
- 注7 徳田武「江芸閣と日本文人交流年表」『近世日中文化交流史』2004年
- 注8 伊藤紫織「真景図を写す—武元登々庵をめぐる画家大西圭齋と大原東野」『尚美学園大学芸術情報研究』第26号 2017年
- 注9 高橋博巳「一八〇〇(寛政12)年、奥州への旅 一黄葉夕陽文庫蔵《奥遊詩画卷》をめぐる一」『広島県立歴史博物館研究紀要』第5号 2000年
- 注10 大西允、字叔明、號圭齋、又號一簣烟客、中津藩畫員、居于荏戸、巧花卉翎毛、仿明人鉤花點葉法、參以清人蔣南砂、用筆穎而雅淡、施色妍而不俗、名聞于時、或云、初學沈南蘋矣、予嘗遊日田邑、觀其蹟、極佳、杜仁里曰、圭齋西遊、到我邑之初、客求畫者頗夥、圭齋不意、日以酣飲爲務、客嘖、良久遂遂而出之、圭齋佯出、潛到僻處、賃一小屋、屏居不出、作畫數十紙、迺告前之求畫者曰、畫成、君輩載酒來、隨意取去、客以爲騙人謀醉、益嘖、無敢往矣、往者僅兩三人、而各恣意選取、且與盡醉而還、其餘悉焚棄、浩然遂行、聞特喜余畫、到處遇則請取、時出展閱、嘗作墨牡丹及淡彩杜鵑花、郵寄見示、余意謂、他日東行相見、浮勳請益、或有拙技所少進、(惜哉イ)一旦罹病□
- 注11 守安取「浦上玉堂・春琴・秋琴父子の生涯と芸術」『文人として生きる—浦上玉堂と春琴・秋琴父子の芸術』岡山県立美術館 千葉市美術館 2016年
- 注12 竹谷長二郎『武元登々庵『行莽詩艸』研究と評釈』笠間書院 1995年
- 注13 古賀十二郎「来舶諸家」『長崎画史彙伝』1983年
- 注14 『特別展 孤高の画人・菅井梅閣—没後百五十年記念—展図録』仙台市博物館 1994年 参照
- 注15 木崎好尚「山陽と竹田」『頼山陽人と思想』1943年
山陽は登々庵について、次のように記す。
此備前人武元登(登省く)庵名質・字景文・別号登々庵、以行庵称と申雅客、去冬以来、当地・厳島辺遊寓被致候て、私父子共、新知ながら如旧識仕候。元来三備にて知名の士也。菅太中(茶山)などの詩社、此人其傑 然者御座候。備前北方と申在中の処士にて、此度破産漫遊、書法伝授申事申立にて筆耕往来仕候。
- 注16 竹谷長二郎掲書
- 注17 「割符留帳」『関西大学東西学術研究所資料集刊九「近世日中交渉史料集」』関西大学東西学術研究所 1974年
- 注18 『竹田莊詩話』江大来の項 注に「聞稼圃学問文章廻出弟芸閣右蓋亦落第人」とある。
- 注19 注13に張宗蒼について『歴代画史彙伝』『墨林今話』をひく。また、大野政右衛門の『元明清書画人名譜』(1878年)に「張宗蒼字默存一字墨岑号篁村」とする。李雲海について、『長崎画史彙伝』は細川十洲『梧園画話』をひいて「李良は、婁東派に属し、王原祁、黃鼎、張宗蒼、李良と云ふ画系をなす者なりと云ふ」とする。
- 注20 浜田義一郎『人物叢書 大田南畝』吉川弘文館 1963年
- 注21 注11図録 松尾知子編「浦上玉堂・春琴・秋琴年譜」

- 注22 注14図録解説 濱田直嗣「菅井梅関・人と芸術 一孤高の絵師の残したものと一」
- 注23 森陽外『伊沢蘭軒』
- 注24 鶴田武良「研究資料 鐵翁・逸雲・湘帆について」『國華』1098号 1986年 鶴田氏は「渡邊手録年譜」により文化元年、あるいは文化年間の説を数度の来航により画名が知られることから当説をとられた。
- 注25 高橋博巳「画家の旅／詩人の夢 一菅井梅関と長崎・京坂詩画壇一」『金城学院大学論集 人文科学編』177号 1997年
- 注26 注14図録には「梅関高士送別書画幅」が紹介され、江芸閣他長崎での交友の寄せ書きが書かれる。現在、長崎歴史文化博物館に所蔵されることを長岡枝里氏に教示いただいた。図録解説にはそのほかにも同様の寄せ書きが伝わった可能性を示唆しているが、近年、仙台市博物館で双幅の菅井梅関送別の寄せ書きが収蔵された。江芸閣、張秋琴、静巖、梅泉らによる。また、同館および東北大学附属図書館所蔵の『三界居録』は長崎での交友、特に江稼圃、江芸閣と梅泉らの交渉を示す書簡が記録されこれらの解明により、さらに梅関と長崎の人々との交渉を跡付けることができよう。
- 注27 橋富博喜「第四章 太宰府の絵師や作家たち 第一節 絵師 一斎藤秋圃」『太宰府市史 建築美術工芸 資料編』太宰府市 1998年
- 注28 高橋博巳「長崎の田能村竹田」『江戸文学 特集 文人画と漢詩文I』ペリかん社 1997年
- 注29 注7
- 注30 中野三敏「亀齡軒斗遠の後半生 一天保の風流一」『文學研究』87 九州大学文学部 1990年
- 注31 徳田武「野村篁園の集唐詩と清客の批評」『日中文化研究』第1号 1991年、『近世日中文化交流史の研究』2004年所収
- 注32 徳田武「遠山荷塘と亀井昭陽」『明治大学教養論集』223 1989年
- 注33 國金海二「野田笛浦『得泰船筆語』について」『文藝論叢』24 文教大学 1987年
- 注34 長崎歴史文化博物館 蔵品に複数の江芸閣の書や賛を持った絵画があるとのことで、その他の作例も含めて、今後の調査を要する。
- 注35 『太宰府市の文化財 第133集 太宰府の絵師調査報告I 齋藤秋圃・梅圃関係資料』太宰府市教育委員会 2018年3月31日
- 注36 唐権「長崎歴史文化博物館蔵『書簡集』について」『近世日本と楽の諸相』京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター研究報告12 2019年
- 注37 注27 橋富論文、本図の存在は井手誠之輔氏に教示いただいた。

- 注38 注4に掲載
- 注39 中野三敏「亀齡軒斗遠の後半生 一天保の風流一」『文學研究』87 九州大学文学部 1990年 中野氏は文中で、市島米城『隨筆 頼山陽』を引用しており、市島氏の用いた版は未見とのことであった。九州大学附属図書館に同名の書が2本あり、1本がそれにあたるものか。
- 注40 注6 小林論文
- 注41 注1参照

本校をなすにあたり、斎藤秋圃の資料について、井形栄子氏、錦織亮介先生に貴重なご教示をいただいた。作品調査、画像提供について仙台市博物館 樋口智之氏、寺澤慎吾氏、長崎歴史文化博物館 長岡枝里氏にご配慮いただいた。謝意をのべたい。図3は東京文化財研究所提供。

本稿脱稿後、塚本磨充「市河米庵と董其昌 一江戸時代後期における明清文化と正統派受容の様相一」『美術史談叢』36 2020年3月(田代裕一朗氏教示)により、市河寛斎が長崎で劉慄「山水図」を入手した際に、江芸閣、張秋琴に跋を得るなど、『小山林堂書画文房目録』に載るコレクション(東京国立博物館)に市河寛斎、米庵と長崎の清人との書画の交渉ほか、その影響について重要な指摘の内容であった。また、司馬江漢と同時期に長崎へ下った春木南湖は文晁門下の人物で、梅関関連文を載せた『無声詩話』を記した金井烏洲の師でもあり、菅井梅関との交渉があったとすれば、梅関が長崎へ下る動機となる。烏洲の兄が「梅関高士送別会之図」賛者の莎邨である。さらに、梅関送別幅(仙台市博物館)の対となる幅に劉培原が題字を書き献呈した「南湖」という人物についても推定できるのではないかと考えた。ただし、題字ではあて名を「仙府南湖」としている。また、南湖同様、伊勢長島藩増山雪齋配下であった十時梅崖も長崎へ下っており、さらに長崎と文人、その背景について検討すべきであることを感じている。